

アメリカ合衆国における移民史研究

——マークス・リー・ハンセンを中心に——

高柳 乃 輔

一、はじめに

アメリカ合衆国が移民によってつくられた国家であることはいうまでもない。自由と平等を掲げる民主主義国家を発足させてから、合衆国は実に多くの移民を受け入れ、その労働力を経済発展の原動力とし、また雑多な人びとからなる移民をアメリカ社会に適合させ、国民的統合を実現してきた。膨大な数にのぼる移民の流入は、合衆国内に大きな購買力と労働力を生みだし、それが産業と投資を拡大させ、需要の増大と新しい産業部門創出の要因となって新しい雇用の機会をつくり、これがまた新たな移民を引きつけてきた。この過程がくり返されることにより、アメリカ合衆国は、一九世紀に西部開発の進展と農業および工業の飛躍的な発展を達成し、世紀末には世界一の資本主義国家に成長した。二〇世紀前半には二度の世界大戦において重要な役割を演じ、今世紀なかばには超大国として世界の指導的立場にたち、今日なお大きな影響力を国際政治にあたえている。このように移民を受け入れることによって、めざましい歴史的発展を達成できたのは、唯一アメリカ合衆国だけであろう。

しかし移民の流入過程の研究、および移民が合衆国社会にあたえたインパクトについての研究は、移民の流入と合衆国社会への同化が自明のものであるという認識から、長くとりあげられなかった。移民をアメリカ形成の中心にすえ、移民史ないし移民社会の分析をおこなう基礎的研究は、ようやく一九四〇年代に始まった。それ以後、さまざまな社会問題が論議をよぶにつれて、雑多な民族的出自をもつ人びとが、ひとつの国家に住むことから生ずる競争や対立、摩擦が社会問題の根本的原因のひとつであるという認識が広まり、それとともに移民研究も大きくクローズアップされ、今日にいたっている。

さらに深刻なことには、近年刊行され大きな反響をひきおこしたアーサー・シュレジンガー・ジュニアの『アメリカの分裂』⁽¹⁾が明らかにしているように、移民が一定のプロセスを経てアメリカ社会に統合されうるといふ信念は、今日根底から揺らぎ、アメリカが人種的に分裂し、このままでは国家そのものの分裂すらひきおこすといふ懸念すらささやかれている。このような意味において、移民史についてより明確な知識を得て理解を深めることは、とりもなおさず現在の合衆国社会の抱える問題を一層明らかにすることにつながる

ものと考えられる。

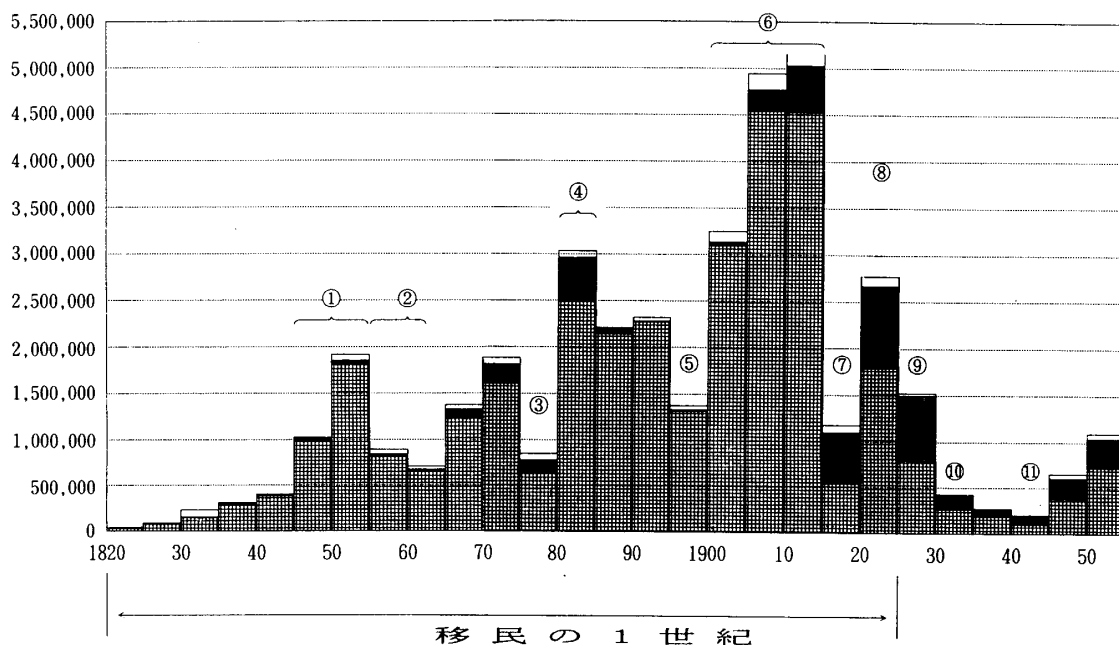
本稿では移民の数量的考察をおこなったあと、これまでの移民史研究がどのように進められてきたのかをみてゆく。今回は移民史研究の先駆者といわれるマーカス・リー・ハンセンに焦点をあて、移民史研究の出発点がどこにあったのか、問題点は何であったのか、それについて研究者はどのように考えていたのかを明らかにしたい。

二、移民の数量的考察

まず一八二〇年から一九五四年までに、合衆国に到来した移民数の推移をみてみよう。はじめにこの時期、どこから移民がやってきたのかをグラフ1⁽²⁾でみると、圧倒的多数の人びとがヨーロッパから到来したことを理解できる。一九〇五年以降では、南北アメリカ、とりわけカナダからの移民が大きな比率を占めていることがわかる。この一三〇年間に到来した移民総数は、四〇一七万五四一〇人にのぼった。グラフをみれば容易にわかるとおり、これら膨大な数の移民は、川の流れのように一定していたわけではなく、波のように増減を繰り返しながら流入していることに気づくであろう。

このような移民の統計記録は一八二〇年⁽³⁾から始まるが、一八三〇年代にかけて移民は漸増するにすぎなかった。しかし一八四〇年代後半からその流入は急激に増大し、一八四五年から四九年までに一〇〇万人をこえ、前の五年間の二・五倍に達し、一八五〇年から五四年までに一九〇万人をこえる移民が到来する。合衆国社会に一度に大量の移民が流入し、社会にその影響をあたえる最初の動きは、一八四五年から一八五四年にかけておこった(グラフ1の①を参照)。

グラフ1 アメリカ合衆国への移民



〰ヨーロッパから ■南北アメリカから
□その他の地域から

以下番号のみ記す)。この影響を受けて、一八五五年にニューヨーク市南端のキャッスルガーデンに移民局が設置された。その後合衆国において一八五七年の不況がおこり、移民は減少する。一八六一年からは南北戦争が勃発し、移民の流入はさらに減少した⁽²⁾。南北戦争の終結後、合衆国はまさに怒濤のような勢いで工業化をすすめ、産業社会へと変貌してゆく。この一九世紀後半という時期に、一八七三年の不況期⁽³⁾と一八九三年の不況期⁽⁵⁾を除いて、最初のピーク⁽¹⁾「一八四五年から一八五四年まで」をはるかにうわまわる一四〇〇万人が到来した。そのピークは一八八〇年から一八八四年にかけておこり、この五年間で三〇〇万人を突破したのである⁽⁴⁾。一八八六年にはニューヨーク港の入り口、リバティ島に自由の女神像が建てられ、一八九二年にはエリス島へ移民局が移され、移民到着の玄関口となる。そして二〇世紀にはいり、かつてない規模の移民が到来した。一九〇〇年から一九二四年までに、一二九二万八〇〇〇人という膨大な数の人びとが合衆国の土地を踏んだのである⁽⁶⁾。第一次世界大戦のため一九一五年から一九一九年にかけて移民は減少したが⁽⁷⁾、戦後一九二〇年代にはいり、また増大の兆しがあらわれている⁽⁸⁾。しかしここで合衆国政府は、いままでも無条件といえるほどに移民を受け入れてきた従来の方法を大きく修正し、一九二四年に移民制限法(または割当移民法)を決定して移民の流入に歯止めをかけた。実際ヨーロッパからの移民はこれを契機に減少に転じ⁽⁹⁾、一九二九年の大恐慌によって激減⁽¹⁰⁾、第二次世界大戦の勃発によって、一八三〇年初頭の水準にまで減少してしまつたのである⁽¹¹⁾。

このようにみると、移民の流れは一八二〇年からはじまり、一九二四年の移民制限法によってひとつの区切りをつけたと考えられる。

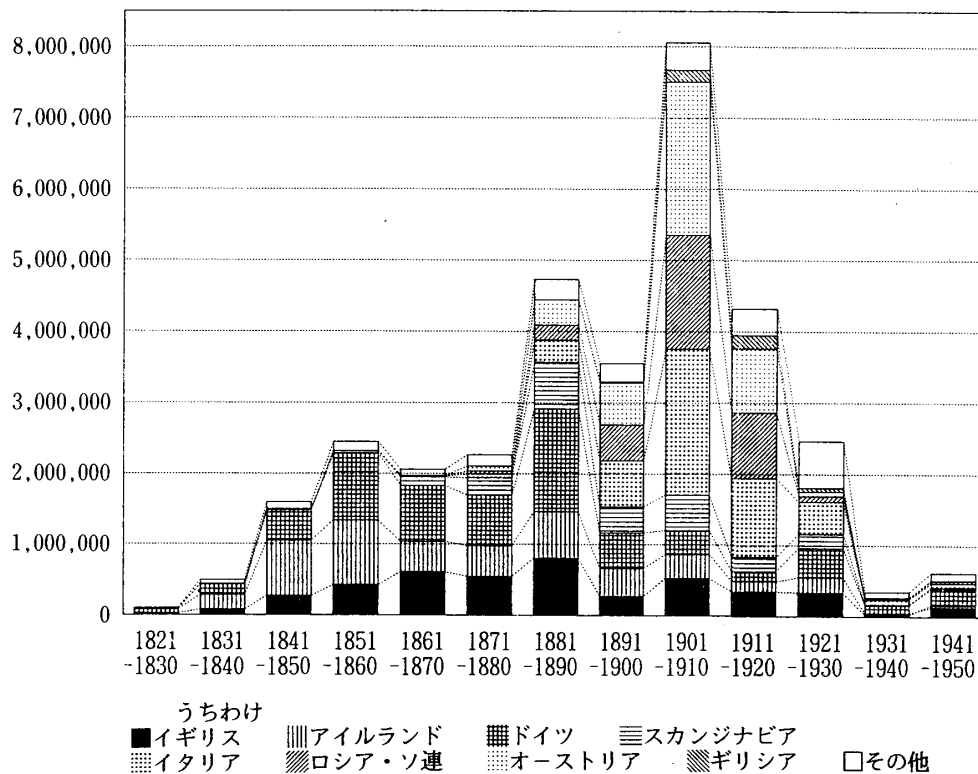
一般にこの時期を「移民の一世紀 A Century of Immigration」という⁽⁵⁾。

この一世紀に到来した移民を検討する場合、いくつかの時期に区分することが可能である。前述のように、合衆国およびヨーロッパの政治状況や経済状態の変動によって、移民が大きく制約されていることを理解できる。このような社会変動によって、波のうねりのように増減する移民の流入を、南北戦争以前の第一期、南北戦争以後一九世紀末までの第二期、一九〇〇年から一九二四年の第三期に区分することもできるだろう。この三期における移民数はつぎの通りである

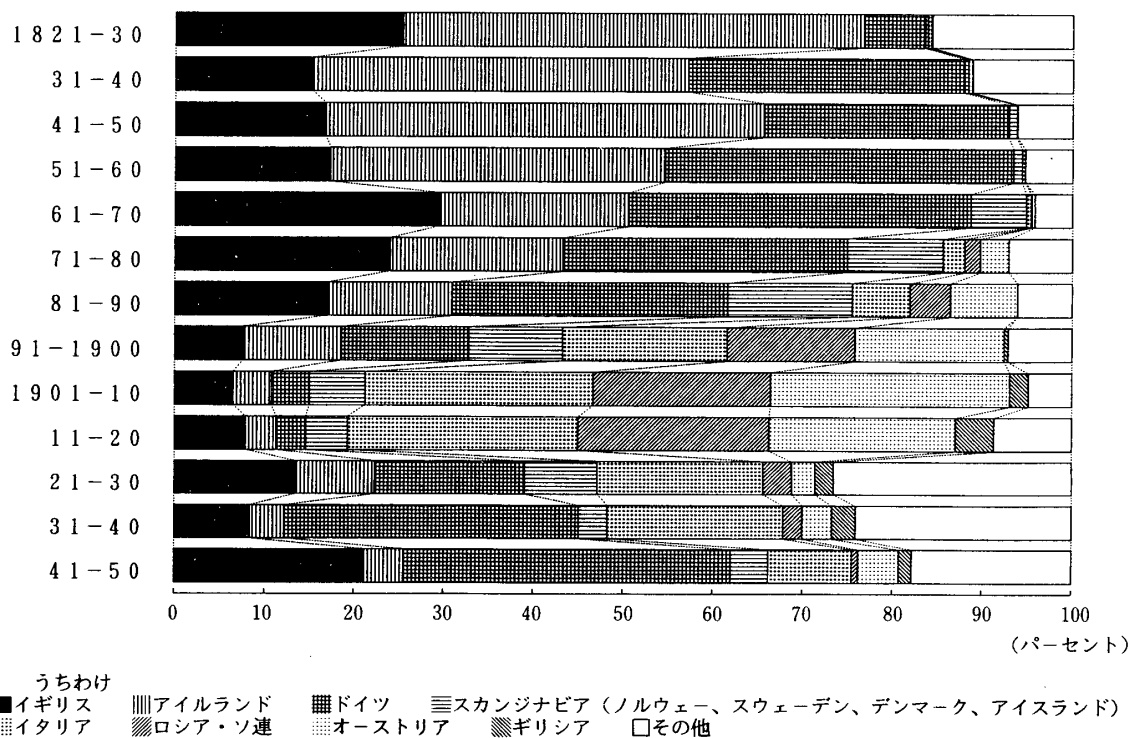
一八二〇年から南北戦争以前まで 五〇六万二〇〇〇人
 南北戦争から一八九九年まで 一四〇六万二〇〇〇人
 一九〇〇年から第一次世界大戦まで 一二九二万八〇〇〇人

一般にはこの一世紀を、一八八〇年代を境にふたつに区分する。移民の出身地域の変化をもつて、一八八〇年代以前に多数を占めた西欧や北欧からの移民、すなわちイギリス、アイルランド、ドイツ、スカンディナヴィア半島出身者を旧移民とよび、一八八〇年代以降激増した東欧や南欧からの移民、すなわちイタリア、ロシア、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロバキア、ギリシア出身者を新移民とよんでいる⁽⁶⁾。ウィリアム・デリンガムを委員長とする合衆国移民委員会が、一九一一年に提出した移民委員会報告書に、この新移民という言葉が使われている⁽⁷⁾。グラフ2および3は、出身地別にみたヨーロッパからの移民数および割合を示している。これによれば、一八二二年から一八七〇年までの移民の出身地は、九一・二%までがイギリス(二〇・八%)とアイルランド(三五・六%)、ドイツ(三四・八%)で占められている。「移民の世紀」の前半五

グラフ 2 出身地別にみたヨーロッパ移民



グラフ 3 ヨーロッパ移民の出身地別の分布



〇年は、この三地域で占められていたことがわかる。一八七〇年代および一八八〇年代においてもイギリス、アイルランド、ドイツからの移民は全体の六五・九%を占めていたが、この時期に増加したのはスカンディナヴィア半島出身者（ノルウェー、デンマーク、スウェーデン）であった。一八七〇年代から八〇年代にかけて、スカンディナヴィア半島出身者は全体の一二・八%を占めている。

一八八〇年代より変化しつつあった移民の出身地域の変化は、一八九〇年代にはいり、誰の目にも明らかになる。いままで圧倒的多数であったイギリス、アイルランド、ドイツ、スカンディナヴィアからの移民（西欧、北欧系移民）は、相対的にも絶対的にも減少し、かわってイタリア、ロシア、オーストリア＝ハンガリーからの移民（東欧、ロシア、南欧系移民）が激増したのである。後者が前者を上回ったのは一八九六年のことであったが、一八九〇年代から一九一〇年代にかけて、六五・七%がイタリア（二三・九%）、ロシア（二九・〇%）、オーストリア＝ハンガリー（二二・八%）出身者で占められたのである。また一九〇〇年代から一九一〇年代にはギリシア（二〇年間）で三五万七二〇人、全体の二・八%、移民制限法が制定される一九二〇年代には、ポーランド（二二万七七三四人）で全体の九・二%、チェコスロバキア（二〇万二一九四人）で全体の四・一%など、ヨーロッパでも南欧や東欧とよばれる、より多様な地域からの移民が目立つようになっていた。これら新移民は、旧移民と比べて単に出身地域が異なるというだけではなく、質的にも異なるといわれる。前述した移民委員会の報告書によれば、彼らは一般に貧困で、同化が遅いうえに知的水準も低く、金を得るための一時的な渡米者であるといみなされていた。

このように「移民の世紀」の後半には、ヨーロッパの各地域から

多様な民族的出自をもつ人びとが合衆国に到来したのである。大量の低廉な移民労働力を吸収することによって、合衆国はめざましい経済発展をとげ、世紀末には工業生産において世界一の地位にたった。

三、移民史研究の流れ

(1) マーカス・リー・ハンセンの紹介と意義

移民制限法が成立する一九二四年に先立つ三年前、アーサー・シユレジンガー・シニアは「アメリカ史における移民の重要性」と題する発表をおこなった⁽⁴⁾。このなかで彼は、アメリカ人の生活と諸制度に対する移民の影響と、アメリカという独特の環境が、移民の流入によって常に変化する人口構成に与えた影響という二点をとりあげ、合衆国の歴史が移民によってつくりあげられてきたことを力説した。そして一九世紀末から激増しつづける南欧や東欧移民を、合衆国社会が受け入れるには問題が多いことは認めながらも、国内的には流入を制限し、さらに国際的には孤立外交をおこなおうとする当時のアメリカの世論に警鐘を鳴らした。またシユレジンガー・シニアは、当時の保守的雰囲気から誤った歴史認識からきていると批判し、現在の状況把握に必要なこととして、合衆国における移民史の重要性を主張したのである。

一九二四年には割当て移民法（移民制限法）が成立し、一九二五年以降の移民は激減した。この事態から、合衆国の発展を支えてきた移民の流入する時代が終わりを告げたのではないか、という認識が研究者に広まっていた。一九二〇年代は、また世界大戦の影響を受け

て、ナショナリズムが高揚していた時代でもあった。彼らは「アメリカ人とは何か、アメリカ人はいかにして形成されたか」という問題について考え、その研究の出発点として移民史をとりあげたのである。大戦間時代において、このような観点からアメリカ合衆国の歴史における移民の役割を説明しようとする取り組みは、カール・ウィトケ、ジョージ・ステイブソン、セオドア・ブレーゲンらの中にあって、とりわけ注目すべき先駆的業績を残したのが、マークス・リー・ハンセンであった。

マークス・リー・ハンセンは、一八九二年にウイスコンシン州ニナーで生まれた。彼の父はデンマーク、母はノルウェイから、両者とも一八七一年に合衆国へ移住してきた。つまり彼自身が移民の子供、アメリカ生まれの二世として、前世紀末から今世紀前半を生きたのである。アメリカ社会に二世として生まれ育った背景に、彼が優れた移民研究の業績を残した遠因をみることもできよう。不幸にも一九三八年五月一日、四五歳という若さでハンセンは亡くなったが、シュレジンガー・シニアの尽力によって、彼の論文集は *The Immigrant in American History* (1940) として、および遺稿は *The Atlantic Migration 1607-1860* (1940) としてそれぞれ出版され、その後の移民史研究に大きな影響をあたえた。なかでも後者は一九四一年にピューリッツァー賞を受賞している。さらに死の一年前、ハンセンがおこなった二つの講演のうち、とりわけ「The Problem of the Third Generation Immigrant」と題された講演文は、いわゆる「ハンセンの法則 Hansen's Law」として、現在も論議にのぼる大きな問題を提起したのである。

ここではハンセンの研究業績を紐ときながら、アメリカ合衆国における移民史研究において、彼が何を問題として提起し、それをどう

解釈したのか、また彼の研究の優れた点と問題点はどこにあるのかを明らかにしたい。

まずハンセンの代表作 *The Atlantic Migration 1607-1860* (1940) をみてみよう。要約を述べる前に、この著作の特徴と意義について簡単にふれておこう。これは移民史研究の先駆的な著作であり、これまでの単に民族集団の功績を称賛するだけの書物とは異なって、合衆国社会が移民によって築きあげられ、アメリカ国民もその融合によってできあがったとの主張をもっておこなわれた、本格的な移民史研究である。こうしてハンセンによって移民史の基礎づけがなされたのであるが、それでは何が彼を移民史研究にむかわせたのだろうか。この点についてまず想起されるのは、フレデリック・ジャクソン・ターナーの影響である。⁽¹⁰⁾ 一八九〇年におけるフロンティアの消滅を契機に西部開拓史を研究し、そこに特殊なアメリカ的要因を把握しようとしたターナーを恩師にもつハンセンは、彼から歴史研究の重要性とその方法論について、多くのものを学んだと考えられる。⁽¹¹⁾ ターナーはアメリカの特質の解明をフロンティアに求めたが、それと同じように、ハンセンはその解明を移民史に求めたのである。ハンセンが移民史の研究に直接関心をもつ契機になったのは、一九二四年に制定された移民制限法であった。一八一二年より続いた「移民の一世紀」がそこで終わったと考え、特殊なアメリカ的要因を把握するための重要性を、移民史が持つと考えたのではないかと思われる。

「移民の一世紀」をとりあげた彼は、これまで単に統計的に把握するのみで、まったく注目されなかった一九世紀の移民に初めて着目し、その分析にとりくんだ。同時に初めて移民のヨーロッパ側からのプッシュ要因に注目、移民の母国の社会や政治、経済状態など

のさまざまな問題について考察をおこなったのである。確かにヨーロッパからの移民は、川の流れのように一定のスピード、一定の流量をもって展開されたのではない。後述するハンセンの著書で述べられているように「移民の一世紀」とよばれる時期についても、移民の半数が到来したのは一八四七年から一八五四年までの八年間、一八八〇年から一八九〇年の一年間、一九〇九年から一九一四年の六年間の合計二五年間だったのである。この事実は、移民の流れがヨーロッパと合衆国それぞれにおける戦争、災害、社会や経済の変動により、時には促進され、また時には中断されたことを意味している。このような事実は、いちはやくハンセンの注目を引きつけることとなる。彼はこれまでアメリカ史の研究で無視されていた移民の問題について取り上げ、アメリカ社会の形成における移民の重要性について指摘した。そして移民史の時代区分をおこない、「移民の一世紀」を提唱し、各時期の移民の出自と若干の数量的考察をおこなっている。いっぽう移民とアメリカ化の問題も考察し、移民を規定した要因は、白人ストックの大量の到来ととらえ、彼らの同化が進むことよってアメリカ国民が形成されたと主張している。

次に具体的な移民の流入について考察をすすめる。ハンセンによれば、一八一五年の平和に始まる一九世紀以後のヨーロッパおよびアメリカ合衆国の歴史は、驚くべき人口の大移動がみられた時期である。彼はこの影響を「西方への衝撃 the westward impulse」と名づけている。ハンセンは元来、人間は移動を喜ばないという。人は祖父や曾祖父の眠る、目に見えぬ保護があり、幼いときから親しんだ慣習や生活、家族や親類や近所の人びとに囲まれて育つ小さな世界を、大人になって受け継いでいくものである。ではなぜ近代において、合衆国の発展を支えた大規模な人口の移動・移住がみら

れたのであろうか。これが彼の最大の問題提起であった。

そのうえでハンセンは、一九世紀の移民の特質は何かと問いかける。彼は移民の特質解明のため、一八世紀から一九世紀半ばまでにおけるアイルランド、スコットランド、イギリス、ドイツ、スイスの農村地域の変貌を詳しく描写し、農村からの移民が圧倒的に多かったと述べている。今まで固く農村共同体に結びつけられていた人びとを移民に駆り立てた動機は、旧世界のさまざまな抑圧——移動の禁止や土地保有の不自由、製品の製造や販売の制限、価格の固定化、地域ごとの慣習や法・圧政——からの解放、あるいは個人の自由な活動を約束してくれる国への脱出であったと把握している。⁽¹²⁾

ハンセンはまた著書の最初において、移民の時代区分をおこなった。一八一五年から一九一四年までの時期は一般に「移民の一世紀 a century of immigration」とよばれているが、それは合衆国の移民にとってもっとも重要な時期であった。つまりナポレオンの没落から世界大戦の始まりまでに、一〇〇回にわたる移民の機会を生みだし、大洪水のような流れが大西洋を超えて西へ移動し、彼らを持つ新大陸へと運んだのである。このようにハンセンは合衆国の移民史を一〇〇年間として設定し、しかもヨーロッパ人の大西洋を越えた移住の歴史としてとらえている。彼は一九三八年に没したが、彼の生きていた最後の数年は、一九二〇年代に制定された移民制限の影響が明白にあらわれていた時期であった。⁽¹³⁾

先に述べたようにハンセンは、移民の世紀一〇〇年間を三つの時期に区分しているが、各時期の特徴は次のとおりである。最初は一八三〇年代から一八六〇年までで、この時期の中でも移民数は一八四七年から一八五四年が最大となる。これはアイルランド移民の大量流入が主要因である。また彼はこの移民をスコットランド高地地

方やウエールズ山岳地方、アイルランドというケルト地域からの脱出だと把握している。続いて移民の大量流入がみられる第二期は、一八六〇年から一八九〇年である。この時期にはスカンディナヴィア半島からの流入が歴史上最大となる。ドイツ移民もライン河沿いの人びとから、エルベ河以東の地域やオーストリアの西部山岳地帯、デンマーク平原やスウェーデン南部、ノルウェー内陸部からの脱出者に変化した。彼らはチュートン（ゲルマン系）の子孫であり、言語・慣習からみても、アメリカへやってきた移民のなかで、もつとも同質的な集団を形成していたとハンセンは述べている。第三期は一八九〇年から一九一四年までで、二つの地理的、風土的に異なる地域からの移民が、新世界で混ざりあうことになった。ひとつはスラブ地域からで、もうひとつは地中海地域である。前者にはフィンランド人・ラトヴィア人・リトアニア人・ポーランド人・カレリア人・ウクライナ人が含まれ、ロシア帝国の支配下で伝統的な農業生活を営んでいた。また地中海地域の移民は、イタリア人やギリシア人、地中海東岸部出身者に区分していた。⁽¹¹⁾

これら三つの時期のなかでも、一八四七年から一八五四年までの八年間、一八八〇年から一八九〇年の一年間、一九〇九年から一九一四年の六年間の合計二五年間だけで、「移民の一世紀」に到来した人びとの半数をこえる一七〇〇万人がやってきた。

このように移民の流れは、国民的あるいは民族的規模にまとめることが可能である。だが同時にハンセンは、彼らは決して国家的計画に従って移住した訳でもなく、また民族集団ごとの移動をおこなった訳でもなかった点を指摘する。この一世紀にアメリカへ到来した人びとは、多くが個人的動機によって移民を決意したのである。

ここで彼は、いかにして何百万人という外国人をアメリカに受け

入れ、いかにして彼らをアメリカの経済構造のなかへ適合させることができたのか、という問題を提起する。彼によれば、移民は西漸運動に貢献したが、その過程に関する問題は、これまでほとんど研究者の注目を集めてこなかった。フロンティアという広大な自由地が移民を待ち受け、彼らは容易に土地を取得できたという一般的な理解があつたからである。だがハンセンはこのような理解にもかかわらず、ヨーロッパ移民はフロンティア向けの人間ではなく、また経験も金もない彼らがフロンティアの開拓生活にはいるためには、より複雑な移住のプロセスが存在したという事実を指摘している。⁽¹²⁾

しかし一般的にいえば、経済のあらゆる側面で成長をとげていた一九世紀、とりわけ南北戦争以前のアメリカには、新参者が好みや手段、必要性によってうまく落ちつくべき場所にふりわけられるまで、場所から場所へ、仕事から仕事へと移っていける機会が存在した。一九世紀半ばまでの移民の大多数は農村出身者であり、合衆国において土地を購入し自営農民になることを願ったとハンセンは把握し、南北戦争前夜に、独立農民を生み出す過程は頂点に達したと述べる。彼はフロンティアへ移民がすぐに入植できたかどうかには疑問をもっていたが、この時期に合衆国の産業がめざましい発展を遂げていたため、彼らがアメリカ社会に順応し、土地購入の金を貯えるための雇用の場も同時に提供されていたと考えていた。好景気の時には工業発展を進め、移民労働者を雇用し、不況の時には彼らを西漸運動に吸収してきたアメリカ的環境が、移民をアメリカ化させた⁽¹³⁾とハンセンは主張している。

いっぽうヨーロッパ側の要因を考えれば、移民はヨーロッパの人口成長の結果だととらえられる。この人口圧力が生活のあらゆる局面に影響を及ぼした。人口圧力の解消と食料増産のため、開墾が促

進された。移動の自由を制限し、結婚を抑制する政策がとられた。しかしこのような努力も限界に達し、他地域への移住が行われることになったとハンセンは理解していた。

ここで彼は、植民地時代から一八六〇年にいたるまでの、各時期の移民流入の実態とその特質をとりあげている。

〔植民地時代〕

イギリス人の北アメリカ大陸東部への植民活動の目的は、一つには貿易拠点を築くことであり、二つにはエリザベス時代から問題であった、余剰人口の捌け口としての入植であった。一六〇七年、ヴァージニアにジェームズタウンが建設され、イギリスの本格的な植民が始まった。この入植を可能にしたのは煙草栽培の成功である。

この煙草栽培に必要な土地と労働力の確保のために、最初の移民労働者が到来する。渡航費用を支払った者に対して、一人五〇エーカーの土地を無償で付与する「ヘッドライトシステム（人頭権制度）」が、一七世紀半ばまでのヴァージニアへの基本的な移住の方法となった⁽¹⁷⁾。多くの人びとは渡航費用を支払えず、年季契約奉公人となって、一定期間の煙草栽培に従事した。

北部ニューイングランドへの植民は、この地の開拓が厳しく、また先に移住した者の排他性によって、一七世紀の半ばには、既に移民の到来はなくなった。一七世紀後半に移民を集めたのは、中部大西洋岸植民地であった。とりわけペンシルバニアは、未開拓の土地を、クエーカー教徒は勿論のこと広く一般に譲渡したため、入植者たちの人気をよんだ。ペンシルバニア植民地による、未開拓地の入植がひとつの流れとなった⁽¹⁸⁾。

このように移住の目的をハンセンは、いかにして土地を獲得し、自営農民となれるかという点におき、土地獲得の機会の有無が定住

と移住を決定した要因だと考えていた。入植地がある程度開拓され、定住が定まると、その土地に住む人口がきまり、新参者の機会は無くなってしまふ。つまり新しい未開拓地（「フロンティア」）のみ、新参者が入植して人口が拡大していける余地がある。この傾向は、植民地時代からすでに存在していたと主張する。

一七一三年、ユトレヒト条約の締結により、北アメリカにおいてイギリスが優位になった時には、ニューイングランドは定住者とその子孫によって新参者の機会がなく、また南部植民地は奴隷制度の導入によって労働力を確保していた。このため移民は中部植民地に集まることになった。このさい移住者は渡航費用を支払うために、渡航地で年季契約労働を行う「リデンブショナー（身請け引き受け渡航者）redemptor」となった⁽¹⁹⁾。一八世紀、北アメリカに到来したのは、イギリス人よりも、むしろスコットランド人やアルスター地方出身のアイルランド人、ドイツ人やスイス人である。彼らがこのリデンブショナーシステムを使って到来したのである。

〔建国期から一八一五年まで〕

次にハンセンは、建国以後の合衆国の状態とアメリカ国民の形成について言及している。

建国当初の合衆国政府は土地問題、公債、産業政策に直面したが、これらの政策に関して移民問題に何らかの決定をくださなければならなかった。この事実は、移民問題が党派にかかわる問題であったことを示している。この点は、ハンセンの長期的な視点に影響をあたえた。しかし政府は当初、制限もしい代わりに勧誘や保護することもなく、傍観視する姿勢をとった⁽²⁰⁾。

建国期の移民の規模や性格を決定したのは、戦争であった。打ち続く戦乱は合衆国を孤立させ、どうにか続いてきた移民の流れを変

化させてしまった。独立戦争の八年間、続く一七八三年から一七九三年における合衆国内の不安定な政治状態、フランス革命の勃発からナポレオン戦争まで続いたヨーロッパにおける動乱、一八一二年から二年間続いた合衆国とイギリス間の戦争が相次いで勃発した。このようにヨーロッパと合衆国の双方で社会混乱が続いたために、移民の流れは零にもならず、全く途切れてしまったのである。²¹⁾

この時期、独立戦争の時代に生まれた子供たちが成人し、アメリカ社会が新しい発展の段階にはいるとともに、ナシヨナリズムの高揚がみられた事実は周知であるが、ここにハンセンは移民の流入が途絶えたことも作用したと指摘している。移民が到来しなくなったことは、「*坩堝 melting pot*」をおだやかに煮詰まらせ、ナシヨナリズムの高揚をうながしただけではなかった。すでに独立以前より始まっていた、非イギリス系（ドイツ系、オランダ系、アイルランド系）の移民集団が英語を話し、イギリスの法律や生活様式を受け入れることがこの時期に確立し、イギリス系の文化・生活様式を中心にして最初のアメリカ化がおこなわれたと述べている。²²⁾

ただし、宗教上の相違はこの後も存続し、これが民族的特色を受け継ぐ基礎となった。²³⁾

〔一八一五年から一八一九年まで〕

このように建国期から一八一五年にかけて、移民の流れは中断したが、ナポレオンの没落と、一八一二年の戦争の終結により、一八一五年以降大西洋貿易が復活し、それに伴い、移民の新しい流れが始まったという。一八一五年から一八一九年のパニックにいたる時期に、イギリスからの輸入品を扱う貿易が活発化し、商品の流通経路に沿って、同時に移民も増え始める。この移民増加の要因には、平和の到来と貿易によって、「*機会の土地 the land of opportunity*、

アメリカの情報ヨーロッパの農村に伝わった点がある。農村のあちこちで語られ始めたのは、新世界の土地獲得や就労の可能性、さらにアメリカの自由についてであった。戦争の終結によって、農産物需要の増大とそれに伴う好況は終わりをむかえ、農村経済は再び停滞した。この状況に将来への危機感を持った若者が、移民を真剣に検討するようになる。しかし当時の渡航運賃は依然として高く、リヴァプールからニューヨークまで一〇ポンドもかかった。このため移民は、ほとんどが身請引き受け渡航者 *redemptor* であり、辛い契約労働を強いられていた。また合衆国に渡った人のなかから、合衆国の生活を紹介する書物がヨーロッパで出版され始めるのもこの頃だという。これらの書物には、アメリカ人の西部入植の様子が紹介され、農地獲得の可能性が熱心に語られていた。²⁴⁾

一八一二年の戦争が終結したアメリカでは、ニューヨークを中心とする東部海岸都市に建設ブームがおこり、石工や大工、木工や荷車引きなどの労働者が不足していた。多くの仕事を受注できるだろうという期待感から、先にアメリカに渡った移住者により、前もって渡航費用を支払い、移民を勧誘する制度が始まったといわれる。一八一八年には、大西洋貿易にたずさわる商業活動および建設業はブームの頂点に達していた。そしてこの年の移民は三万人に達したのである。当時の移民労働者は、半数がニューヨーク港とフィラデルフィアに上陸し、中部大西洋諸州に到来した。その内訳をみると、たとえば一八一七年には二万人がイギリス（その大部分がアイルランド）²⁵⁾ から、八〇〇〇人がドイツから、二〇〇〇人がフランスから到来した。合衆国議会は移民の増加にあわせ、一八一九年に移民に関する法案を通過させる。船舶五トンにつき乗船者を二人に制限し、同時に渡航者数を税関吏が記録するよう義務づけた。この法案以降、

一八二〇年から政府側の統計記録が残されるようになる。⁽²⁶⁾

一八一九年はまた、土地投機の過熱によって不況が襲った年でもあった。この不況により、一八二〇年代前半に合衆国への移民は減少する。そして主な渡航手段であった身請引き受け渡航も行われなくなる。

〔一八二〇年代初頭〕

合衆国におこった一八一九年の不況は、ヨーロッパに不評を買った。ヨーロッパ側からの移民流出は続いていたが、一八二〇年代初頭は、合衆国以外の地域へ移住が行われたとハンセンは述べている。一八一九年から一八二五年までは、ドイツ人やスイス人にはロシアやブラジルへの移住が好評であり、またイギリスでは既に一八一七年からカナダへの移民が増大していたが、この時期に一層それが奨励されたことを明らかにしている。このように、ヨーロッパにおける農産物の不作や戦争などの社会不安が移民を増やし、合衆国での経済不況が移民流入を減少させるという視点は、ハンセンに一貫してみられる。⁽²⁷⁾

〔一八二〇年代後半から一八三〇年代〕

合衆国へのヨーロッパ移民の流入が本格的に開始されたのは、一八二〇年代の後半ということになる。その数は一八二八年に二万七〇〇〇人に達し、不況前に最高を記録した一八一八年の三万人に迫った。そして一八三二年には一気に六万人を超えたのである。この時期の移民は、渡航から上陸以後の就労、生活まで全て自力で処理しなければならなかった。この意味でハンセンが述べるように、一八二〇年代後半から一八三〇年代にかけての移民は、一八五〇年代の大きな流れを導く先駆者であったといえるだろう。⁽²⁸⁾

一八二七年と二八年の移民には、合衆国で土地を獲得し、独立の

機会を得ようとするアイルランドの小農民が多数含まれるという新しい局面がみられ、ドイツからの貧農も増加していた。加えて一八二九年から三〇年にかけてヨーロッパは寒冷な気候が続き、不作であった。このため新天地に希望を託す人びとが、一八三〇年に多数、合衆国へ到来する。一八三〇年代におけるヨーロッパからの移民は、主にドイツ人とアイルランド人によって増加したが、その理由としてヨーロッパ側において強調されるのは不作や天災、戦争であり、合衆国側ではその経済状況、すなわち働く機会があるか否かであった。この時代はまだ移民の出生地はごく限られ、たとえばアイルランドではアルスター地方に住むプロテスタント教徒が多数を占め、アイルランド西部や南部、中部に住むカトリック教徒の移民は少数だった。経済的機会の多さとともに、合衆国では多くの宗教セクトがその信条に従って活動している点も、宗教上の理由で移住を望む人びとを引きつけた。ドイツ人移民のなかにはユダヤ人も増加の傾向にあった。また工業化の促進が農村経済を変貌させたことによって、合衆国への移住を選ぶ人びとも現れる。たとえばウェールズ人の増加は、本国の鉄道建設が促進され鉱山の開発・工業化が進展したことにより、働く場を失った人びとがペンシルヴァニア鉱山地帯で雇用獲得をめざしたからである。⁽²⁹⁾

先駆的移民が新世界でつかんだ経験と知識は、一八三〇年代にヨーロッパにあって紹介され、大量移民の流れを生み出す要因となる。合衆国の情報がヨーロッパに伝えられるにつれ、移住に期待をかける人びとは増大したが、移民本人の帰郷ほど、衝撃的な印象を隣人に与える場合はなかった。まず一八一〇年代に身請引き受け渡航者、つまり自らの肉体を渡航費用として売ってまで移住した者が、一五年後に成功者として帰ってきた。これを皮切りに、合衆国

での成功話は、肉親や親類はおろか村々に広まり、移住の夢を伝えた。⁽³⁰⁾

合衆国の経済発展が、いかにヨーロッパの人びとを魅了したかという見解を、ハンセンは各国の文献を引用しながら強調する。たとえば彼によれば、合衆国を紹介する本が社会的に大きな反響をよんだのはドイツである。一八二九年に出版された本では、合衆国の政治や経済のことは紹介されず、もっぱらミズーリにある農村の日常生活が書かれていた。この本は版を重ね、スイスからも引き合いがくるほどであったという。⁽³¹⁾

一八三〇年代から四〇年代初頭にはいと、新聞や本、学校での紹介、移民を載せる船舶の広告、肉親の親類の手紙がますます頻繁に出回るようになり、移民熱を煽った。二年から三年も苦勞して働けば、立派な農場を手にいられる。アメリカはあらゆる仕事の機会に恵まれた労働者の土地であり、重税もなく、徴兵もなく、自立も結婚も自由であり、検閲されない新聞から多くの情報を得ることができると。すべての人びとは法のもとに平等であり、政治に異なる見解をもついても、それが人の価値を決めることにはならない。とりわけ経済的な自由が多くの人びとを魅了したのである。また、たとえ移民した後、その野心を満たせず、どこかでとどまったとしても、子供に自分の夢を託すことができるかと語られた。このことをみれば、一八三〇年代に語られたアメリカは、ハンセンが指摘しているように、まさにコモンマン（庶民）のユートピアであった。⁽³²⁾

聖職者や哲学者は、宗教的観点からアメリカ行きを説いた。モーゼの出エジプトが引き合いにだされ、合衆国こそ現在の「新しいカナーン、約束の土地 New Canaan, the land of promise、だと説かれたのである。⁽³³⁾

一八三〇年代初期の観察者は、このような状況によって、移民はその性格を変化させているとみている。かつて移民と言えば、農業労働者や職人、徒弟といった独身の若者や、自分たちで独立を望む若い夫婦であったが、今や四人ないし五人の屈強で活動的な息子たちを含む家族集団に変わってきたのである。この家族集団での移民は、強い団結心を持ち、働き手を多く抱えていることから成功する可能性が高かった。合衆国がめざましい発展を遂げる出発点となつた一八三〇年代において、アメリカのヴィジジョンはヨーロッパ移民にとり、限らない夢となつて立ち現れてきたのである。⁽³⁴⁾

〔一八三〇年代から四〇年代の移民激増の理由〕

ナポレオンの大陸支配が終結した一八一五年から、革命が勃発する一八四八年までの約三〇年間は、ヨーロッパにおいて一応の平和が保たれた時期である。しかし、この間まさに合衆国への移民が激増していくのである。それはいったい何故であろうか。

大西洋を渡る移民増加の要因のひとつには、大西洋貿易の活発化にともない渡航費用が安くなり、移民を運ぶ船舶も増加したことがあげられる。移民を輸送する船舶が定期運行化するのは、一八三〇年代のことである。輸送の活発化にともなつて、次第に渡航費が安くなり、一八三〇年代には、一八一〇年代に必要な渡航費の三分の一から五分の一にまで下がった。貿易活動の盛んな港、たとえばリヴァプール港やルアーブル港に移民向けの船舶が集中するようになり、移民は出港の期日を待つことなく、そこを出発点とするようになる。またこの頃から銀行業も移民の渡航費を扱いはじめ、前払いにより渡航費を支払うことも一般化する。⁽³⁵⁾

ハンセンは移民激増の大きな理由として、ヨーロッパ社会、とりわけ農村の変貌をとりあげている。まず彼は人口増加が大きな社会

的圧力になっていたと指摘し、その典型的な例としてアイルランドをとりあげている。ドイツや他のヨーロッパ諸国においても、人口圧力は高かったが、戦時における穀物需要の増大が農村経済を一時に活発化させ、人口圧力を緩和した。商品経済が導入されるなか、独立を望む若者によって耕地は細分化され、農民はますます自給自足が不可能になり、副業としての賃金労働が大きな比重を占めるようになる。このように細分化された耕地でも生活できたのは、馬鈴薯を常食としたからであった。戦時の需要がなくなり、穀物に代わり畜産物へ需要が変化すると、従来の農業労働力を必要としなくなり、大量の余剰人口を生み出すことになった。⁽³⁷⁾

一九世紀なかばにおいて合衆国への移民が激増していたとき、他の地域への移住も試みられていた。たとえばニュージールランド、ブラジル、南アフリカ、サモア、グアテマラやホンジュラスなどの中央アメリカ、ニカラグア、アルジェリアなどである。しかしこれらの地域への入植は、資金不足、風土病の蔓延、物資の欠乏などに加え、特産物や農産物を産出することもできず、ほとんどが失敗に終わるか時期尚早であった。⁽³⁸⁾

〔一八四〇年代後半における大量移民の流入〕

一八四〇年代後半にはいり、合衆国への大規模な移民流入が開始される。この原因はアイルランドやドイツでも、農産物需要の変化にともなう農村社会が変貌し、働き口を失った貧農や農業労働者が増えていたうえに、唯一の常食だった馬鈴薯の凶作がひきかねとなっておこったと、ハンセンは指摘している。なかでもアイルランドの大飢饉を詳しく描写している。著作の章題が示すように、一八四〇年代後半の移民は、まさに「飢餓からの脱出 the flight from hunger」であった。⁽³⁹⁾

このような移民の流れはヨーロッパ人の西漸運動であり、新世界の発見にはじまり、二〇世紀まで続く大移動の一面をなすものであった。一八五〇年から一八六〇年の間に、約二六〇万人が合衆国に到来した。この間における各民族の増加はつぎのようであった。

アイルランド人	九六万二〇〇〇人から一六一万一〇〇〇人へ
ドイツ人	五八万四〇〇〇人から一二七万六〇〇〇人へ
イギリス人	二七万九〇〇〇人から四三万三五〇〇〇人へ
フランス人	五万四〇〇〇人から一一万人へ
スイス人	一万三〇〇〇人から五万三〇〇〇人へ
スカンディナヴィア半島のひと	一万八〇〇〇人から七万二五〇〇人へ

このように膨大な数の人びとが合衆国へやってきたが、一九世紀後半の移民、すなわち南北戦争以後一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて激増する移民とくらべれば、南北戦争以前に到来した移民は、豊かな利益をアメリカ文明にもたらしたと主張する。⁽⁴⁰⁾

これまで紹介してきたハンセンの見解は、ほぼつぎのように要約することができるだろう。移民の流れは元来ヨーロッパ人の西方への膨張運動で、合衆国は彼らを受け入れ、独立の生活を確保する機会をあたえた。彼らがアメリカ大陸という広大な空間に定着し、西部の開拓をすすめる、世代を重ねてゆくうちに、独特のアメリカ人が形成された。またヨーロッパからの人口流出の原因を、人口圧力、戦乱、政治や経済上の不安、農業構造の変化といった社会変動にもなう不安定さにおき、ヨーロッパでの絶望は、アメリカへの希望につながる」と捉えていた。このように描くことによって、合衆国が如何にヨーロッパ人にとって「約束の土地、新しいカナーン」であったかが強調されている。彼らはアメリカに無限の富を得る機

会を見いだしたのであった。⁽⁴⁰⁾

ついでハンセンは、雑多な人びとからなる移民が、南北戦争の試練に直面して真にナショナルな合衆国国民になったという問題へと続けようとしていた。彼は南北戦争を、雑多な移民を受けいれながら、南部と北部の分裂を防ぎ、国民的統合を達成した事件だと把握し、合衆国の発展を促進するために南北戦争が不可避であったと是認している。⁽⁴¹⁾つまりナショナリズムの観点にたつて移民史研究をすすめようとしていた。今日では奇異に思われるこのような解釈も、ハンセンがおかれていた時代状況を反映しているものと考えられる。彼はもともと三部作の第一作としてこの本を著述した。二作目において一八六〇年から一八八二年までを扱い、ヨーロッパ側からの移民の要因を本書と同じように考察しながら、すでに合衆国に定住していたさまざまな国籍の人びとが、南北戦争期に顕著なアメリカ化を達成した点について考察をすすめようとしていたのである。三作目では中央および南部ヨーロッパからの移民の増加に焦点をあて、現在（一九三八年当時）までの移民史を描こうとしていた。しかしハンセンの死によって、この構想は未完のままになった。

ハンセンは移民史の研究を通して、何を明らかにしようとしたのであろうか。ハンセンにとつて最大の学問的関心は、アメリカ人とはどこからきたのか、アメリカ人はどのような生活をしてきたのか、ということであった。このような観点は、前述したように、彼の恩師フレデリック・ジャクソン・ターナーが主張したフロンティア説の影響を受け、その延長線上にあったとみることができるとは、しかし彼は単にフロンティア説を受け入れただけではなく、特殊アメリカ的なものの形成を移民に求め、移民を通し、アメリカがひとつの国民に統合されるプロセスを明らかにしようとした。まさにこ

の点においてこそ、彼が後の研究者から移民史研究の先駆者と呼ばれる所以である。またこのような彼の観点は、現在の移民史研究や現代アメリカの抱える社会問題の考察の出発点になっているともいえるだろう。

しかし彼のいう合衆国への「移民」とは、*The Atlantic Migration* という題名が示しているとおり、「ヨーロッパから大西洋を越えてアメリカに到来した人びと」という意味で使用されている。つまりヨーロッパ系白人を対象が限定されており、中国や日本、インドやカリブ海地域の人びと、南北アメリカやメキシコ人を移民としてとりあげてはいない。移民をひとつの範疇、つまりヨーロッパ人と固定した点に、ハンセンが「移民がアメリカでひとつの人民になれる」という同化の問題に関して、楽観的な見方をもっていたことがうかがえる。しかし現在の視点からすれば、これはハンセンの限界といわざるを得ない。彼の移民史研究には、現在アメリカ社会で大きな問題をなげかけている先住民のインディアン、黒人、アジア系移民など非白人のエスニックグループは全く考慮の対象となっていない。また移民が合衆国社会にどのように順応していったのか、合衆国社会においてどのような問題を生み出したのかは考慮されていない。そして彼らが合衆国において、どのような労働に従事し、賃金を得てどのような生活をしたのかも、ほとんど叙述がない。アメリカ側の背景については、広い自由地が存在し、労働力は常に不足していたというふうに単純にみられている。これらの欠陥から、移民史の先駆的研究者ハンセンにおいてさえ、アメリカ社会への移民流入は自明のものとみなされ、異なる民族集団どうしの軋轢や摩擦がもたらす、合衆国内部における社会問題への関心も薄かったことを理解できる。それは、ハンセンを含めた同時代人が持っていた時代認識

アメリカ合衆国における移民史研究—マーカス・リー・ハンセンを中心に—

の限界点でもあったと私は考えている。

注

- (1) アーサー・シュレージンガー・ジュニア著、都留重人監訳、『アメリカの分裂』（岩波書店 一九九二年）参照。
- (2) U. S. Department of Commerce. *Historical Statistics of the United States* (1960), pp. 56-59.
- (3) 一八世紀末に合衆国が発足してから、ヨーロッパではフランス革命が勃発、ナポレオンの登場によって、各国の緊張が高まっていた。いわゆるナポレオン戦争、および同時に戦われていた合衆国とイギリスとの戦争（一八一二年の戦争）が終結した一八一五年以後、北アメリカ大陸とヨーロッパの動揺がおさまり始めてから、大西洋を経由する貿易も再開される。この大西洋貿易の再開にもなつて、合衆国への移民も開始された。アメリカ議会は、一八一九年三月二日、移民法を制定し、その数を記録するようになった。この一八一九年の法案以降、一八二〇年から政府側の統計記録が残されている。
- (4) 移民数が最高を記録したのは一九一四年で、一二二万八四八〇人であった。
- (5) Roger Daniels, *Coming to America* (1990), pp. 119-184, 287.
- (6) 旧移民と新移民の区分による分析を紹介する概説書としては、明石紀雄、飯野正子、田中真砂子著、『エスニック・アメリカ』（有斐閣選書、一九八四年）八二—一二五ページ。
- (7) *1975 Annual Report: Immigration and Naturalization Service* (1976), pp. 62-64.
- (8) Arthur Schlesinger, "The Significance of Immigration in American History", *American Journal of Sociology* 27 (1921).

- (9) ハンセンの他の業績として、次があげられる。Old Fort Snelling, 1819-1858 (1918) ; *Welfare Campaigns in Iowa* (1920) ; *German Schemes of Colonization Before 1860* (1924).

ハンセンの発表した本や論文、講演のなかで現在も高い関心を集めているのは、一九三七年五月一日にイリノイ集ロックアイランドのオーガスタナ歴史協会での講演文 “The Problem of the Third Generation Immigrant” であった。この講演文は、オスカー・ハンズリン Oscar Handlin の紹介により、“The Third Generation in America : A Classic Essay in Immigrant History” として *Commentary* 14 (November 1952) に再録された。この講演文において、ハンセンは次のような新しい視点をうちだした。同化のプロセスは一方的ではなく、移住してきた一世とその子供、そして孫において、アメリカ社会に生きる中で自分達のアイデンティティをどこに求めるかという姿勢が異なり、約四世代かかって完全な同化がおこなわれると述べ、移民史の研究およびアメリカ化のプロセスにおいて、初めて世代の問題を提起したのである。とりわけハンセンは三世の行動に着目していた。一世は彼らの母国の文化や言語、習慣をそのままアメリカに持ち込み、母国と同じようなコミュニティをつくってアメリカ社会に生きた。二世はアメリカ生まれだが、生まれ育つ間に身につけてしまった父母の出身国の慣習と、アメリカ人としての慣習の間にあつて悩み、その結果として子供時代の記憶を捨て去り、必要以上にアメリカ人たろうと努力するという。そしてアメリカ人として生まれ育ち、社会的成功も約束された三世は、親とは異なつて、劣等感をもつこともなく逆に自分のルーツに興味を示す。これについてハンセンは、息子が忘れたいと願つたことを、孫は思い出したいと願うという、ほとんど普遍的ともいえる現象、だと主張した。この仮説を、ハンセ

ンの法則」という。ハンセンは一九二四年に制定された移民制限法によって移民流入の時代が終わったため、移民一世の問題はなくなつたと推測していた。それを前提とすれば、将来は三世の問題がアメリカ社会に影響を与えると予測できるが、彼ら三世のルーツへの共感が単に祖先礼賛に終わることなく、アメリカ社会へ真に貢献できる内容をもつように、と若い世代に向かって語りかけたのである。ハンセンは、四世以降このような意識はなくなり、完全な同化が達成されると推測していた。後世の史家たちが興味を示したのは、ハンセン自身はもちろんのこと、ハンセンの遺稿を整理して出版したアーサー・シュレジンガー・シニア、*「ハンセンの法則」*をひろめたオズカー・ハンドリン、エスニックグループごとの分析をおこなう叙述スタイルをつくつたカール・ワイトケという碩学が全員、移民一世を両親または父に持つ二世だったことである。彼らはハンセンの主張に大きな共感をいだき、移民史研究の礎を築いた。

「ハンセンの法則」が注目されているのは、三世がいわゆるエスニシティを生み出す集団ではないかという視点である。つまり民族的な経験を持たない世代が、逆にその民族的特質を理念の上で再生しようとする動きが、エスニシティの要因のひとつであると理解されていふ。

William Peterson, "Concepts of Ethnicity" in *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups* (1980), pp. 239, 240, 242.

(10) Frederick Jackson Turner, *The Significance of the Frontier in American History* (New York, 1958), pp. 1-38.

(11) Marcus Lee Hansen, "The Third Generation in America" *Commentary* 14 (November 1952), p. 492.

(12) M. L. Hansen, *The Atlantic Migration 1607-1860* (1st pub. 1940, Harper Torchbook ed., 1961.), pp. 4-6, 18-24. 以下 *Atlantic*

Migration と略す。

(13) このため彼は「移民流入の時代が終わつたと考えていた。M. L. Hansen, "The Third Generation in America" *Commentary* 14 (November 1952), p. 494.

(14) M. L. Hansen, *The Atlantic Migration*, pp. 9-11.

(15) *ibid.*, p. 13.

(16) *ibid.*, pp. 15-17.

(17) *ibid.*, pp. 29-30, 37, 40. 池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開』

(ミネルヴァ書房、一九八七)一七八ー一七九ページを参照。

(18) Hansen, *op. cit.*, pp. 31-32, 35-36, 39-40, 42-43.

(19) *ibid.*, pp. 43-44, 47-48, 51-52. 池本幸三『前掲書』四三一五〇ページを参照。

(20) Hansen, *op. cit.*, pp. 55-56.

(21) *ibid.*, pp. 57, 70-71.

(22) *ibid.*, pp. 71-72, 74.

(23) *ibid.*, pp. 76-77. 宗教上の慣習が移民の民族性を保持した点について M. L. Hansen, "The Third Generation in America",

Commentary 14 (November 1952), pp. 498-499. Hansen, "Immigration and Puritanism" in *The Immigrant in American*

History (New York, 1940), pp. 97-128. 以下同じ強調や下線。

(24) M. L. Hansen, *The Atlantic Migration*, pp. 80-82, 100, 155.

(25) *ibid.*, pp. 81-82, 84, 90, 97-98.

(26) *ibid.*, p. 102.

(27) *ibid.*, pp. 90, 118-119.

(28) *ibid.*, p. 120.

(29) *ibid.*, p. 121. 一八一九年の不況は「一八二五年には回復し、運河

アメリカ合衆国における移民史研究—マーカス・リー・ハンセンを中心に—

や道路建設、倉庫や住宅の受注が増加した。合衆国経済の回復を象徴したのは、一八二五年に完成したエリー運河である。エリー運河の開通が、移民を増加させるきっかけになった点を強調しているのは、例えばハンセンの影響を受けているエルンストの著作にもみられる。R.

Ernst, *Immigrant Life in New York City* (1949), pp. 1-2.; M. L.

Hansen, *op. cit.*, pp. 123, 127-144.

- (30) *ibid.*, pp. 145, 155.
 (31) *ibid.*, p. 149.
 (32) *ibid.*, pp. 151, 156-160, 162.
 (33) *ibid.*, p. 171.
 (34) *ibid.*, pp. 156, 163-164.
 (35) *ibid.*, pp. 154, 178, 180-181, 184, 198.
 (36) *ibid.*, pp. 199-205, 213-214, 224-225.
 (37) *ibid.*, pp. 230, 233-237.
 (38) *ibid.*, pp. 242-261.
 (39) *ibid.*, p. 280.
 (40) *ibid.*, pp. 286, 288.
 (41) *ibid.*, p. 306.